

こらっせ便り

2020年12月12日



【編集・発行】「福島子ども・こらっせ神奈川」

TEL : 045-353-9008、 eメール : info@korasse-kanagawa.org

Web サイト : <http://korasse-kanagawa.org/>

みなさま、半年ぶりのこらっせ便りをお届けします。

コロナ禍でこらっせも事務局会議はオンライン、夏のリフレッシュプログラムをはじめとしてイベントはすべてキャンセルなど活動が制限されていますが、ポストコロナに向け準備をしています。将来のこらっせをどうするか、若いスタッフを中心にワーキング・グループをつくり活動をスタートさせました。

引き続きのご支援をよろしくお願いいたします。みなさま、良いお年をお迎えください。

目に見えない放射能とコロナ禍で、 福島の子供達はいま・・・、各省庁へ要望書を提出

事務局 錦織 順子

神奈川県内の15の民間保養団体からなる「いのち・神奈川」は、毎年秋に各省庁（復興庁、環境省・文科省・原子力規制庁・国土交通省他）と交渉を行っています。

原子炉の爆発という未曾有の環境下に暮らす福島の子供達の、無事を願って続けている「保養」の経験から出た問題とその改善を求める内容です。

今年は、コロナ禍のために、すべての保養活動が中断されたものの今年も2つのテーマで要望書を提出しました。1つ目は、国は「保養」とは定義づけせず「自然体験・交流活動」として予算を組んでいますが、「保養」を国の制度に位置付け、増額し県外の保養団体が使えるように緩和をすること。2つ目は福島の子供たちの甲状腺がんが、246名（2020年8月現在）公表されています。

- ① コロナ禍のため学校の甲状腺がん集団検診が9月まで中断されているがその実態は。
- ② 親の同意が得られず検診が受けられない子が（先行調査だけでも）6万7千名いる。
- ③ 受診率が年々低下することへの対策。
- ④ 「早期発見・早期治療」は鉄則。検診の継続と全員受信への体制づくりをすること。
- ⑤ 「放射線との因果関係は認められない」とするが、何故多発するのか真の原因究明を。
- ⑥ 生涯にわたる健康管理と無償治療のための「健康管理手帳」の発行を。
- ⑦ 放射線の土壌測定を行うこと、空間線量の測定は子供基準の50cmで。
- ⑧ 年間追加被曝はあくまで1ミリシーベルトに—などです。

阿部知子衆議院議員を通して11月20日に提出、12月中頃に文書回答が届きます。私たちのこの働きかけが、福島の子供達の命を守り健全な成長につながることを願っています。

楡葉町 地域の力育む震災後の 10 年

小林 紀子（生活支援コーディネーター兼ボランティアコーディネーター）

東日本大震災からまもなく 10 年を迎えようとしています。あつという間のようですが、震災の記憶は自分のなかでも所々薄れていくような気がして、遠い 10 年だったようにも思います。

横浜市立大学で学び、30 代前半まで横浜で過ごした私は、その後仙台に転居し、新しい生活にも慣れた頃、震災が起きました。ビルの窓ガラスが割れ、道路の亀裂から噴水のように水があふれかえったなかを帰宅した記憶があります。途中から雪が降り始め、停電になったコンビニでわずかな食料を確保し、混乱した町のなかを歩きました。電話はつながらず、電源の切れかかった携帯に横浜の友人から一通のメールが届いたときは、心の緊張がほぐれる思いがしました。夜はライフラインが寸断された暗闇のなかで布団にくるまり、ラジオに耳を傾けました。流れてくる情報は沿岸地の被害状況を伝えるものでしたが、テレビも見る事ができない私にはなかなか想像がつかせませんでした。翌日、街中で新聞の号外が配られたとき、初めて各地の惨状を目にし、崩れるような衝撃が走りました。その日の夜は、明かりの灯らない真っ暗な町の空が無数の星で照らされていたのをよく覚えています。「きれいだな」と見上げながら公衆電話まで歩き、家族や友人に安否連絡をしました。その後、ライフラインが復旧し生活の立て直しができた頃、今いる場所で何かしなければとの思いから、仕事を辞めて宮城県内で最も被害の大きかった石巻に入りました。

当時、多くの支援団体が緊急活動を行っており、私も NGO 団体に入職し広報チームとして活動しました。津波で 1 階部分のごっそりと失われたむきだしの家屋が連なり、道路の両脇には黒焦げの車や瓦礫が積み上げられ、町は荒涼と化していました。陥没した道路をくぐりぬけて牡鹿半島の集落へ向かい、現地の状況を発信する日々が続きました。少しずつ復旧復興が進み、3 年が過ぎた頃、私は福島入りすることを決めました。原発事故により甚大な被害を受けた楡葉町に関わりたいと考え、ここから私の福島での復興支援がスタートしました。

誰もが町の再生を支える主体

楡葉町は福島第一原発から半径 20km 圏内に位置し、原発事故により全町避難を余儀なくされた町です。2015 年 9 月、避難自治体で初となる避難指示解除を受け、住民の帰還が可能となりました。現在では生活インフラが整備され、子どもたちの元気な様子が町のあちこちで見られるようになりました。一方で、生活圏の少し先には、焼却処理が行われるフレコンバッグが広がり、復興の途上であることを実感する光景を目の当たりにします。

震災前と比べて人口が約 4,000 人に半減したなか、住民の皆さん、行政、社会福祉協議会、地域包括支援センター、福祉施設、医療機関のほか、民生委員・児童委員、NPO 団体、企業等が地域を構成し、誰もが町の再生を支える主体となっています。山々に囲まれ、夏にはきらめく水田が広がり、秋には木戸川サケ漁や稲刈りの光景が見られ、太平洋も一望できるこの町の風土に触れると、豊かな暮らしを取り戻し始めたように感じます。地域に出かけると、野菜づくりの話や郷土話、震災前の暮らしや避難時の様子をよく耳にします。とにかく南へ逃げろ、と言われて着の身着のまま避難した話、会津に避難したときに雪景色を見てびっくりした話、避難先でお世話になった話や仮設住宅での楽しかった話、苦労した話、楡葉に戻ってきてよかったという話。それぞれの 10 年を皆さんは過ごされてきたのだと思います。

震災で解けてしまったご近所のつながりは再び結び目をつくり始め、地域の集いの場も活発化してきました。私の仕事は生活支援コーディネーター兼ボランティアコーディネーターとして住民主体の地域づくりをお手伝いするものです。皆さんのパワフルな様子を見ていると、地域のつながりの力を感じます。

かつて仮設住宅の自治会長に言われた言葉があります。「苦いチャンスを与えてくれたからこそ、私たちは変わらなければならない」。このような覚悟をもって町に戻ってきた住民の皆さんに、私はこれから何ができるだろうか。いつもその命題を心に留めながら、町の移ろいをもうしばらく見続けていきたいと思えます。

コロナ禍での活動の新展開を目指して

事務局 首藤 天信

10月18日、こらっせユースのメンバー2名を含む、6名で山北町を訪問。新型コロナウイルス感染症の影響により、これまで通りの活動が困難な中、次の展開を考えていくために、地域とのつながりをさらに深め、地域のことをよりよく知るための交流ツアーを行いました。

あらたな地域資源を確認

はじめに、三保地区の丹沢湖記念館にほど近い「旧山本邸」へ。かつて、県議会議長を務めた方のご自宅が、現在は町の所有となっています。現在は、年に数回、行事の際に使われるのみとのことですが、丹沢湖のほitoriという絶好のロケーション。車の出入りがしやすいよう改修するなど、手を入れていけば、活用の幅がぐっと広がっていきそうな印象でした。



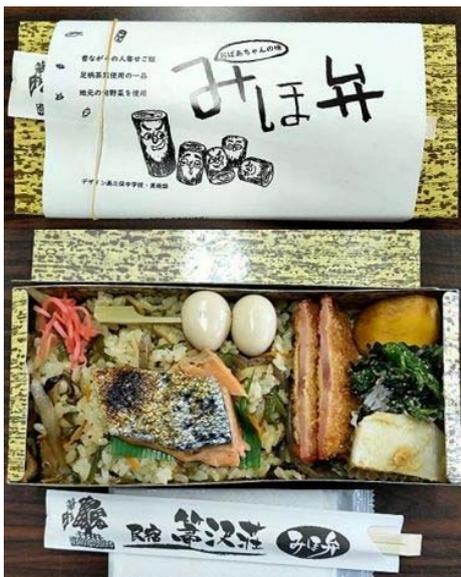
続いて、玄倉地区の「旧丹沢湖ビジターセンター」へ。こちらの施設は県の環境学習等の拠点として運営されていましたが、2014年に廃止、以降、町の所有となり、施設の再活用が模索されてきました。広いエントランスから、吹き抜けの大きな展示室、明るい学習室など非常に素晴らしい設備ですが、ネックは施設が大規模で整いすぎているため、維持費や利用料などが高くなるとのことでした。町は一括で借り上げる事業者を探しています。子どもたちを招いてのプログラム開催なども視野に、イベント期間のみのレンタルやシェアオフィスとしての活用なども提案しました。

移住・定住の取り組みとの協力も

丹沢湖記念館に戻ってお昼ご飯。三保地区の地場産品を使った、民宿「箒沢荘」の「みほ弁」をいただきました。飾らない味でとても美味しいですね。食後は、町の前商工観光課長として、大変お世話になった小塚館長と意見交換。町の進める移住・定住施策などについてお話を伺いました。

今、町で注目を集めているのが、丹沢湖を利用した水上スポーツ「SUP (サップ)」の事業。SUPとは「スタンドアップパドルボード」の略で、ボードの上に立ち、パドルを漕いで水面を進む新しい水上スポーツです。今年から移住してきた若い世代の方が、体験クルージングの事業を開始。すでに地域外を中心に700人を超える参加者がいます。帰り際、実際に行われているところを見ましたが、静かな湖面の上で10名ほどの参加者がインストラクターからのレクチャーを受けて

いました。コロナの影響で、移住や自然に寄り添う暮らし方への注目が高まっているといいます。こうした若い世代を地域に呼び込む取り組みと、こらっせのプログラムを連携させていけたら良いなと思いました。



復興支援まつり(オンライン)に参加して

事務局 横山 満里奈

11月14日(土)に生活クラブ生協・神奈川主催の『第8回 東日本大災・復興支援まつり2020 online』に参加しました。今回は3回目の参加です。去年までは野外でのイベント開催でしたが、今年は新型コロナウイルス感染拡大からオンラインでの開催となりました。

東日本大震災からもうすぐ10年目を迎えますが、今も多くの行方不明者や避難生活者がおり、震災後の震災関連死者は増えていることは忘れてはならない事実です。復興支援まつりは、継続した被災者や復興支援がまだ必要な状況を鑑み、地域の市民に震災の課題、被災地の状況、復興支援、震災を踏まえた新しい社会づくりを広げていくことが目的です。

こらっせも活動紹介動画を作成

イベント当日はyoutubeのライブ配信を利用して、いつもは行きたくても行けなかった遠方にお住まいの方にも見て頂くことができました。こらっせは13時半過ぎの「被災地支援団体・参加団体アピール③」の中に登場しています。オンタイム(生放送)による自己紹介の後に、事前に提出していた3分程度の活動紹介動画を流して頂きました。動画は昨年度の活動内容を中心に、児童館支援や省庁交渉について、動画を作成しました。

動画作成には、工夫を重ね何度も撮影を繰り返しました。動画にすることでより具体的に活動内容を伝えることができたのではないかと思います。同時に他団体の活動や雰囲気も知ることができました。



合成合唱動画も

終盤では、参加全団体による朝ドラ主題歌「星影のエール」の合唱がありました。これは各団体が歌っている動画を1本の合唱動画に編集したもので、一体感を感じることができました。こらっせでは横浜国立大学加藤柚菜さんが歌っていますが、なんと動画のトップバッターに登場しています！とても素敵な歌声を皆様もぜひご覧ください。

その他にもステージイベントに代わるオンライン企画として、和太鼓やアカペラ、女川町の獅子舞も登場しました。「生活クラブ神奈川」のHP特設ホームページ(添付QRコード)から当日のライブ配信が観られるようになっています。イベント後でも同じ空間を共有で

福島子どもこらっせ神奈川
のホームページとツイッター
は右記QRコードから

Web



Twitter



きることはとても有意義だと思います。来年以降のこらっせの活動に生かしたいと思っています。

